

## 第7章 看護学部



### 第1節 看護学部の発足と発展

#### 1. 設置の背景

医学の急激な進歩とともに医療も向上の一途をたどりますます多様化の傾向を示し、高度の知識と技術とを要求される時代において、看護教育を従来の各種学校における教育のみにゆだねるのではなく、一般教育体系の中に位置づけるべきであることが叫ばれ、看護学校の短大昇格、看護系大学の設置などが実現されつつあるが、まだまだ社会的要請にこたえるにはかなりのへだたりがある。

本学看護学部の設置に関して直接、間接の推進力となったと考えられる東京都立保健大学設置準備調査会並びに医科大学等設置調査会看護学部部会の活動を紹介する。

##### 1) 東京都立保健大学設置準備調査会

東京都立保健大学設置準備調査会は、昭和47年8月8日「東京都立の看護大学設置に関する答申」で「東京都立保健大学」の設置を提案し、これを受けて昭和47年9月18日東京都立保健大学設置準備調査会が設置された。

この調査会は看護、理学療法、作業療法その他の保健福祉関係の教育・研究機関として東京都が設立すべき保健大学のあり方について検討し、その結論をまとめて、昭和48年10月20日「東京都立保健大学設置に関する答申」を行った。

答申後、速やかに、保健大学開設準備事務局及び保健大学開設準備委員会を設けて

## 第1節 看護学部の発足と発展

調査検討を継続し、保健大学の早期実現を図るべきであることを強調した。

### 2) 医科大学等設置調査会看護学部部会

本部会では、昭和48年5月以降、看護学部の設置について検討した結果の一応の結論を得たとして、「看護学部設置についての中間まとめ」を昭和49年1月7日に報告した。

その内容は以下の6項目から成っている。

- ①看護教育のあり方
- ②看護に関する高等教育機関設置の必要性
- ③設置の形態
- ④教育・研究組織
- ⑤教育課程
- ⑥実習のあり方

この中間まとめに相前後して、昭和49年度予算に本学看護学部創設準備室の予算が認められたのである。

## 2. 設置の目的

看護学部は、看護学とは Human Care を研究する科学である、という理念にもとづき、まず人間の理解に重点を置き、人間を生物一身体的、心理一精神的、社会一環境的の3面から統合的に理解し、さらに、これを基盤として、その基礎的、臨床的、社会的応用をはかり、発展させ得る専門的指導者を養成するために設立されたものである。

従って、当学部は、単に患者の看護をするための看護技術のみを習得するところではなく、他の諸科学を基盤とした総合科学としての看護学の教育と研究を行う機関であり、看護学は、医学、保健学などと同様に医科学 (Medical Science) あるいは健康科学 (Health Science) に属するものである。

看護学に対する社会の理解を深めるためには、科学としての看護学の体系化を図るとともに、卒業者の進むべき領域を明確にする必要がある。

具体的には、大学にあっては看護系大学、医療短大などにおける教育と研究の直接の担い手である教官として、また、社会にあっては、病院・診療所などの医療施設、機能訓練所、保健センター、保健所、保健行政部門での研究者および指導者として、さらに、直接に地域保健活動遂行の任にあたる実践場面での中核的存在としてなど、

多くの活躍の場が考えられる。

### 3. 設置までの経過の概要

昭和48年(1973)6月12日 相磯学長は部局長会議において本学の看護学部創設について説明し、積極的に検討することが了承され、6月22日の評議会において看護学部創設準備のために昭和49年度概算要求することが学長に一任された。

6月25日 医学部教授会において看護学部創設に関する設立検討委員が選任された。

昭和49年(1974)4月10日 昭和49年度予算が成立し、看護学部創設準備として、定員教授1、事務官1、経費看護学部創設準備経費が計上された。次いで、4月18日の評議会において本学内に看護学部創設調査会、創設準備委員会、創設準備室等の組織を置くことおよび創設準備室長に松本胖教授(医学部、併任)を、事務長に多田高明課長補佐を選任することが了承された。

4月11日に千葉大学看護学部創設準備室(室長松本胖教授、事務長多田高明)が設置された。

また、5月16日の第1回看護学部創設調査会において看護学部募募集定員を60名とすることおよび設置場所を千葉大学亥鼻地区とすることを決定した。

8月1日に千葉大学教授(看護学部創設準備室)として石川稔生が発令され、さらに、10月1日に千葉大学助教授(看護学部創設準備室)として大塚寛子が発令された。

昭和50年(1975)4月22日「国立学校設置法の一部を改正する法律(昭和50年度法律第27号)」の公布施行により、本学に看護学部が設置され、機能・代謝学および基礎看護学の2講座で発足することになった。

さらに同日付で、看護学部長に千葉大学教授(医学部、併任)松本胖が発令され、千葉大学教授(看護学部創設準備室)石川稔生、千葉大学助教授(看護教諭養成所)須永清および千葉大学助教授(看護学部創設準備室)大塚寛子が看護学部それぞれ配置換えされた。

### 4. 設置以後現在までの概要

昭和50年(1975)4月5日 昭和50年度千葉大学看護学部学生募集要項を発表した。

4月8～17日 看護学部入学願書受付を行った。(志願者数466名)

## 第2節 教育・研究活動

4月26、27日 昭和50年度千葉大学看護学部入学者選抜学力検査が行われた。

5月6日 第2回看護学部運営委員会において、昭和50年度千葉大学看護学部入学者の合否判定が行われた。

また、昭和50年度千葉大学看護学部入学者選抜試験合格者を発表した。(合格者61名、男22名、女39名)

5月7、8日 合格者の入学手続が行われた。(手続完了60名、男22名、女38名)

5月10日 昭和50年度看護学部入学式が挙行された。

5月12日 看護学部の授業が開始された。

6月3日 第3回看護学部運営委員会において、看護学部開学式の日程および定例看護学部運営委員会の開催日を決定した。

7月5日 千葉大学看護学部開学式

昭和51年(1976)1月9日 看護学部校舎(2,400m<sup>2</sup>)新営工事に伴う地鎮祭を行う。

4月1日 松本胖学部長は医学部教授を退官し看護学部教授となり、昭和52年5月31日まで学部長として定年延長が認められた。

さらに、病態学、基礎保健学、社会保健学および成人看護学第一の4講座が増設になった。

8月21日 看護学部の校舎新営工事が竣工した。

11月13日 看護学部校舎落成祝賀会を行う。

昭和52年(1977)4月1日 成人看護学第二、精神看護学および小児看護学の3講座が増設になった。

昭和53年(1978)4月1日 母性看護学講座が増設になった。

昭和54年(1979)4月1日 看護教育学講座が増設になった。さらに同日付けで千葉大学大学院看護学研究科が設置された。

## 第2節 教育・研究活動

本節においては各講座ごとに教育・研究活動について記述する。

### (1) 機能・代謝学講座

昭和50年4月発足時に教授石川稔生、助教授須永清が、昭和51年4月には助手山岸治美がそれぞれ着任し、教育、研究活動を開始した。教育面では看護学の基礎領域の

中の、人体の形態・機能面を石川が、代謝・栄養面を須永が担当してきた。研究面では、看護学界にあって世界でも例のない機能・代謝学講座として、その研究の特色はこれからの卒業研究及び大学院開設にともなう研究活動の中から形作られてくるものと考えられるが、現在石川が中枢神経を、須永がホルモンをと、生体を Human としてオーガナイズする2大機能の分野でなされる研究成果は、これら2大機能を介して影響をおよぼしていると考えられる生体への環境の物理化学的、心理的、精神的、社会的作用機序を客観的に解明する基礎的方法論を、将来看護学へ提供するものと期待される。

## (2) 病態学講座

病態学は極めて広範囲にわたる領域を含むが、本講座では、病理学と微生物学（寄生虫学を含む）を中心に構成されている。

昭和51年4月に橋爪壮教授と、中村宣生助教授が着任し、同年10月より吉沢花子助手が着任した。寄生虫学は医学部寄生虫学講座にお願いし、51年度は小島助教授に、52年度より横川教授に非常勤講師をお願いしている。

橋爪教授は千葉大医学部を昭和27年卒業後細菌学教室でウイルス学を専攻し、昭和31年より約20年間、千葉県血清研究所で各種の弱毒生ワクチンの研究を通じ、ウイルスの病原性変異および感染防禦の研究に従事してきた。

中村助教授は千葉大医学部を41年に卒業後、第一病理学教室にて、病理組織学を研鑽し、腫瘍病理学の研究をへて、慢性胆道炎などの研究を行っており、同時に橋爪教授らとウイルス感染症について協同実験を進めている。

## (3) 基礎保健学講座

本講座の教育と研究の基盤は“人の健康は人と環境との動的平衡関係”として捉え、人と環境の諸要因、諸条件が健康に及ぼす影響を考究し、ひいては実行可能の保健対策を導き出すことを目的としている。

教官の教育研究の特色は次の通りである。

教授	野尻雅美	成人保健、特に疾病予防と管理、疫学、学校保健に関する課題
助教授	中島紀恵子	社会経済環境と健康との関係に関する課題
助手	中野正孝	健康指標および住環境に関する課題

教科目として社会人類学、疫学、疫学調査方法、保健統計学および保健学実習を担当している。

## (4) 基礎看護学講座

基礎看護学講座では、看護理論の基礎をつかませること及び看護技術の基本を身に

## 第2節 教育・研究活動

つけさせることを主たる教育目標として授業を行っている。学習の成果は、学生たち自らが臨地実習で受持った患者に看護するという経験を通して確かめることとなるので、学生の主体的なとり組みの姿勢づくりに重点をおいて教育方法に工夫をしている。視聴覚教育の導入によって看護場面のシミュレーションをはかるなど、看護教育方法上の研究が本講座の1つの柱である。研究のもう1つの柱は、看護学の土台となる学問が人間の生活科学であることから、さまざまな人間の生活について歴史的・構造的な研究をすすめていることである。講座メンバーは薄井坦子（理論的研究と教育の経験を生かして）、田口ヨウ子（長い臨床経験及び自力で生活できない人々を支えてきた経験を生かして）、宮崎道子（新しい看護教育を受けた持味と若さを生かして）、細野喜美子（伝統的な看護教育・臨床経験・教育経験を見つめる自己を生かして）の4名である。

### (5) 社会保健学講座

人間の社会生活を重視した看護の機能に関する研究と教育が主体となる。

学部教育では、地域看護学・地域看護方法（小林・平山）を担当しているが、看護活動を保健と福祉の広い視野の中にとらえ、社会の1つの機能として柔軟な対応ができる考え方を育むことが重要なので、社会福祉学等の専門家に非常勤としての協力をうけている。

研究面では、実践活動を通して実証できることが不可欠であるので、2か所の研究フィールドを設定し、学生の臨床実習指導を兼ねて地域看護方法論についての研究を行っている。その1つは、医療施設サイドから素材をとらえて看護活動の展開方法を実証する試みで都内の尾竹橋病院で行っている（小林・小島）。もう1つは、千葉市の協力を得て市内の一定地域内での住民のヘルスニードに対応した看護活動方法の研究である（平山・片平）。

なお、いずれの場合にも初期にはヘルスケアシステムの入口での看護に関する研究を重視していく。

### (6) 成人看護学第一講座

昭和51年4月開講。成人（老人を含む）看護学、特に主として内科系看護学全般を主題としている。

教授 山口覚太郎

担当：成人看護学、成人疾患論、実習

助教授 野口美和子

担当：成人看護学、実習

助手 大名門裕子、坂根喜代子

担当：実習

研究主題と特色としては

- 血液病の臨床遺伝学研究：遺伝性血液病の発見分類についての分子病論的な解析。
- 急性期における看護と治療の役割分担と機能化：同期の患者への看護と治療の協同作業の機能的分担と能率的遂行に関する考察。
- 慢性期ないし安定期の患者のセルフケアへの導入と期待：同期の患者の自助と自己管理への助力と到達への計画と評価。
- 看護よりみた入院時情報のマイクロコンピューター処理：愁訴のコード化と看護手順の組み立て。

#### (7) 成人看護学第二講座

成人看護学第二講座は、昭和52年4月、石黒・小島が着任して発足した。成人（老人）看護学中、外科系看護学の分野を担当している。

人員及び担当

教授 石黒義彦

外科系疾病論、実習指導

助教授 小島操子

成人看護論、実習指導

助手 数間恵子、末次たづ子、渡辺陽子

実習指導

研究主題としては

- 血管外科の臨床的研究、特に虚血性心疾患、慢性四肢動脈閉塞に対する診断、病態、治療を解明し、疫学的因子の解析。
- 重篤な外科系疾患患者の障害を解明し、看護上の問題点を探求、外科系看護の特殊性を考察する。
- クラインス期にある外科系患者の看護査定と介入を検討、そのクラインス看護モデルの作製を確立する。

#### (8) 精神看護学講座

精神看護学講座は、昭和52年4月松本胖教授により開講され、同年4月加藤政子助教授も着任した。松本胖教授の停年退官に伴い、後任として52年9月野沢栄司教授が着任している。

精神看護学の教育にあたっては、人間理解の基本的条件としての精神的側面への接

## 第2節 教育・研究活動

近を中心とし、精神的身体的社会的発達過程を縦断的にとらえつつ、環境との相互作用を理解し、精神の諸機能の基本的理解と、その病態化としての精神症状の把握を目指している。すなわち、狭義の精神疾患の理解に留まらず、社会環境的条件との関連において、広範な人間の精神的問題に対応できる教育を行っている。研究の方向としては、精神看護における患者への接近をめぐる精神力動的諸問題の研究と、精神看護領域における治療的各段階、各場面に対応する各種治療資源の相互的関連を追求し、社会的諸条件と精神的問題の関連性の解明を研究課題としている。

### (9) 小児看護学講座

小児看護学講座は、看護学部発足3年目に開設され、初年度は教授吉武、助教授兼松のみであったが、53年度から助手宮川、西川の2名が加わり、ようやく講座らしくなった。

小児看護学講座では、小児看護概論、小児疾病論および小児看護方法の3科目を3年生に開講している。小児の成長発達、健康児の看護は、この分野に研究テーマをもつ兼松が、病児の看護は、未熟児看護、小児外科看護も含めて、主として吉武が担当している。

小児看護実習は、53年6月から大学病院母子棟3階（小児内科・小児外科病棟）および幼稚園において、4年生が行っている。第1回の実習であり、講座全体で指導にあたっているが、わずか2週間で小児看護の真髄にふれさせることは難しく、就任直前まで小児病院の看護婦であった2人の助手が熱心に努力している。総合実習では、大学病院とともに都立清瀬小児病院での実習を予定しており、目下のところ教育中心の活動である。

### (10) 母性看護学講座

昭和49年9月に、千葉大学看護学部設立の申請に際し、母性看護学講座教官として、助教授・前原澄子（当時千葉大学教育学部・特別教科（看護）教員養成課程・助教授）と講師・松本友子（当時聖隷学園浜松衛生短期大学・非常勤講師）が予定された。

52年に母性看護学概論、母性看護方法および助産論の開講により、両者は看護学部の非常勤講師として講義を担当した。

53年4月、看護学部に予定された最後の講座として、母性看護学講座が開講され、上記2名の予定者と、助手・吉川陽子、臨床指導者・仲村美津枝が就任した。

「産褥における母性看護」、「母性の心身症」を主な研究テーマとし、広く母性看護学の体系確立に向けて研究活動をしている。



教育担当科目としては、母性看護学概論、母性看護方法、と非常勤講師による母性疾病論および領域別Ⅱの臨地実習と総合実習である。また、選択科目として、助産論助産業務管理、助産論実習を担当している。

実習場としては、千葉大学病院が当分の間実習生が多いので使用できないとのことで、東京歯科大学市川病院、都立築地産院、東京大学附属病院分院を主な実習施設としている。

#### (1) 看護教育学講座

昭和54年4月、千葉大学大学院看護学研究科の新設に伴い、看護教育学講座が新設された。

日本の看護教育学は、これを研究する人が極めて少なく、問題意識を持つ人も、従来の企業内教育的発想に足を取られがちであった。その意味で、今回、千葉大学に日本で初めて、看護教育学講座が生まれたことは、看護の歴史に新しい一頁を加えることになる。

当講座では、日本の看護教育制度の現状、問題点の分析と共に、看護教育の特殊性、あるべき姿、教員に望まれる資質等々について、研究・教育して行く。科学が細分化されて行く中で、看護が目指す Human Care を実践・研究するための教育のあり方も、この講座の課題である。

教授 見藤隆子

助教授 杉森みど里

### 第3節 教育課程

当学部の専門教育課程は看護学を人間科学の一分野として位置づけ、人間理解のための方法論にもとづいて組み立てられている。すなわち、人間をこころとからだ、個と集団、さらに正常と異常の面から眺め、以下の5つの柱から構成されている。

1. 人間の生物学的・心理学的理解(人間生物学)
2. 人間社会と生活環境の理解(人間の環境科学)
3. 疾病の理解(病態学)
4. 健康を守る社会的機能の理解
5. 看護実践の理論および方法の理解

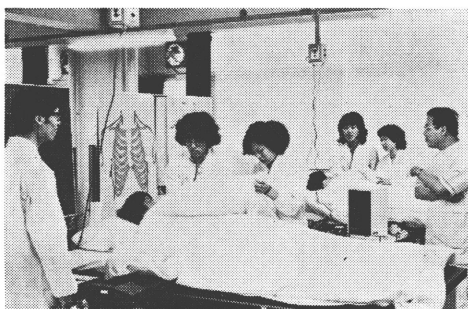
それぞれの柱の内容は次の通りである。

### 第3節 教育課程

1. 人間の生物学的・心理学的理解（人間生物学）
  - a 人体の構造と機能Ⅰ
  - b 人体の構造と機能Ⅱ
  - c 遺伝のしくみ
  - d こころとからだの発達
  - e こころのはたらき
  - f こころの健康
2. 人間社会と生活環境の理解（人間の環境科学）
  - a 人と環境のかかわりあい
  - b 健康と生活環境のとらえ方
3. 疾病の理解（病態学）
  - a 疾病のなりたち
  - b 疾病論
    - ① 成人の疾病
    - ② 老人の疾病
    - ③ 小児の疾病
    - ④ 母性の疾病
    - ⑤ 精神の疾病
4. 健康を守る社会的機能の理解
  - a 健康を守るはたらき
  - b 健康を守る社会のしくみ
5. 看護実践の理論および方法の理解
  - a 看護の原理とはたらき
  - b 成人の看護
  - c 老人の看護
  - d 小児の看護
  - e 母性の看護
  - f 精神の看護
  - g 地域での看護

の5つの柱から成っており、さらに臨地実習、卒業研究などにより知識の統合と応用力を養うことを志向している。

なお、助産コース（選択）も設置されている。



機能学実習  
循環生理学(心電図・心音図)の実習



代謝学実習  
光電比色計による血中ブドウ糖の定量



基礎看護学実習室  
自己学習用のコーナー  
教材作成中  
VTRの一斉視聴・個別視聴の設備をし、自己  
学習・グループ学習のために教材や必要物品の  
開放システムをとっている。



病院における看護学実習



病院における看護学実習



地域看護学実習—家庭訪問をして寝たきり患者  
の看護を実施

## 第4節 現状と今後の課題

当学部 of 建物基準面積5,940m<sup>2</sup>に対し既設校舎面積は2,400m<sup>2</sup>であり、3,540m<sup>2</sup>不足している。このため、旧病院建物・その他3,128m<sup>2</sup>を医学部から一次借用している現状である。旧病院の改築が終了し医学部が移転した後に、医学部基礎棟を改修して移る予定になっている。

学生定員は、入学定員60名、総定員240名、修業年限4年で、教養課程は前半の2年、専門教育課程は後半の2年となっている。

昭和53年度で学部が完成し、教育体系が整備され、教官の研究も活発になってきたので、紀要の刊行が計画され、昭和53年9月、学部に紀要編集委員会が設けられ、第1号誌を昭和53年3月発行した。

また、本学に看護学部が設置されて4年を経過した現在においても、文部省における看護系大学の設置基準はなく看護学教育課程も確立されていない現状であり、日本における国公立の看護系6大学で組織されている看護系大学協議会では、文部省の科学研究費助成金を受けて、これらの問題を解決するため研究を進めてきている。昭和51年度および昭和52年度に総合研究(B)で、それぞれ、看護教育課程に関する研究と看護系大学の設置基準に関する総合的研究を行った。

昭和54年度より2年間の大学院修士課程の設置が決まった現在、その研究単位となる講座として考えた場合、また、当看護学部が看護婦養成と言うより、その指導者、研究者の養成に主目的があるとすれば、その教育はより基礎となるべき多くの学問（いわゆる基礎医学系に人文・社会学系を加えたもの）の科学的方法論を教授する講座が設置される必要がある。一方、実践の学問としての看護学研究の場、すなわち看護教育学研究センターおよび可能ならば独自の付属実習病院を要求し、看護学部としては大学でしかやれない又はやらねばならない基礎的な看護学の研究を今後新たに確立して行く必要がある。

## 教 官 一 覧

(昭和54年3月31日現在)

学科	講 座	氏 名	職 名	専攻分野	講師以上の 在職期間	備 考
看	機能代謝学	石川 稔生	教 授	形態機能学	昭和50. 4 ~	
		須永 清	助教授	代 謝 学	昭和50. 4 ~	
	基礎看護学	薄井 坦子	教 授	基礎看護学	昭和50. 5 ~	
		田口ヨウ子	講 師	基礎看護学	昭和50. 5 ~	
	病 態 学	橋爪 壮	教 授	微 生 物 学	昭和51. 4 ~	
		中村 宣生	助教授	病 理 学	昭和51. 4 ~	
	基礎保健学	宮入 正人	教 授	基礎保健学	昭和51. 9 ~	
		中島紀恵子	助教授	基礎保健学	昭和51. 4 ~	
	社会保健学	平山 朝子	助教授	地域看護学	昭和51. 4 ~	
	成人看護学 第一	山口覚太郎	教 授	内科系看護学	昭和51. 4 ~	
		大塚 寛子	助教授	内科系看護学	昭和50. 4 ~ 53. 7	逝 去
	成人看護学 第二	石黒 義彦	教 授	外科系看護学	昭和52. 4 ~	
		小島 操子	助教授	外科系看護学	昭和52. 4 ~	
	精神看護学	松本 胖	教 授	精神看護学	昭和50. 4 ~ 52. 5	停 年
野沢 栄司		教 授	精神看護学	昭和52. 9 ~		
加藤 政子		助教授	精神看護学	昭和52. 4 ~		
小児看護学	吉武香代子	教 授	小児看護学	昭和52. 4 ~		
	兼松百合子	助教授	小児看護学	昭和52. 4 ~		
社会保健学	小林富美栄	教 授	地域看護学	昭和52. 4 ~		
母性看護学	前原 澄子	助教授	母性看護学	昭和53. 4 ~		
	松本 友子	講 師	母性看護学	昭昭53. 4 ~		

教官一覽

(創設準備室)

氏名	職名	在職期間	備考
松本 胖	室長	昭和49. 4 ~ 50. 4	併任 本務医学部教授 看護学部へ
石川 稔生	教授	昭和49. 8 ~ 50. 4	看護学部へ
大塚 寛子	助教授	昭和49.10 ~ 50. 4	看護学部へ